

日本舞踊 藤間流教授 藤間勘保さんに聞く —— 聞き手・立川恭子

# 伝統の古典を踊る



板敷きの正面に「藤間勘保」と書かれた表札がかかる稽古場。裏とした着物の勘保さんに、日本舞踊の奥の深さを語っていただいた。

○勘保さんと日本舞踊のかかわりについてお話していただけますか。

私の母が言うには、小学校二年、七歳の時に、自分からどうしても踊りをやりたいたいと言いついて、藤間勘七先生のところへ習いにいくようになりました。昭和二十三年のことです。学校が終わると、毎日、殿町の稽古場に通っていました。中学、高校時代も、ずっと日本舞踊を続けて、十九歳で藤間流名取になりました。当時としては若い名取でした。その後、どうしても踊りが好きだったので、親に「短大にやったつもりで東京に行かせて」と頼みこみ、人間国宝の藤間藤子先生のもとで、かよいの内弟子にしてもらいました。朝の十時ころから夜九時ころまで、ずっと藤子先生のところにいるのですが、実際に稽古をつけてもらえるのは十分か十五分。二年弱くらいいて長岡に帰り、結婚し、家を新築するときには稽古場をつくってくれまして弟子を持つようにもなりました。もう六十年近く日本舞踊を踊っています。

○どんな人たちが日本舞踊を習いに来られているのですか。

今の日本舞踊には大きく二通りありまして、演歌のような今ふうの唄に合わせて踊る新舞踊と、清元、常磐津、長唄などを踊る古典です。私は古典しかしませんし、伝統の古典を踊るのが私の誇りです。そのかわり、弟子は多くないですけど。これまでに数人を名取に育てました。いま、私のところに習いに来ているなかで

一番若いのは、幼稚園の年中さんと小学三年の姉弟。その上は、いきなり五十歳代なんですけど(笑)。日本舞踊というと芸妓さんを連想しますが、私のところは、そういう意味では素人さんが中心。長岡の芸妓さんは和泉流と花柳流がお稽古場になっています。



○勸保さん自身は、どのように稽古なさるのですか。

私は藤間流家元の流派に属しています。家元の藤間勘右衛門さんというのは実は歌舞伎役者さんで、四世勘右衛門は「花の生涯」で井伊直弼を演じた尾上松緑さんと同一人物なんです。現在の家元も数年前に「葵徳川三代」に家光役で出演しておりまして。日本舞踊は、最初は形が美しいというのが基本で、その上で、だんだんと動作のひとつひとつの意味が分かってきて自己表現ができるようになるのですが、これでいいということの

ない芸の世界です。今も、月に一度は藤子先生の跡を継がれた蘭景先生のところへ東京までかよっています。ようやく三十分ほどのお稽古をつけていただけのようになりました。人間国宝の藤子先生でさえも、「芸の道 八十路こせしも また遠く」と言われていました。



○長岡の日本舞踊をめぐる現状とこれからについて、どのようにお考えですか。

本格的に踊るためには、三味線などの地方じかたさんをそろえる必要がありますが、今の長岡の現状はテープを回している会が多いです。日本舞踊というのと、むしろかきそう、とか、厳しそうというイメージがありますが、昔のように、毎日、ビシバシ、稽古したら、誰も来ませんので、今は随分変わりました。でも、ただ楽しくやれたらということですと踊ることの本来の意味が体感できませんし、伝統の舞踊の形を崩してしまうと本来の意味が変わってしまうように思います。何はともあれ、まず、実物を見ていただくというのが一番かもしれませんね。どういうものなのかを知って欲しいと願っています。